

イントロダクション——アンスティチュの創設者、クローデルと稲畑
京都大学人文科学研究所 立木康介

みなさま、アンスティチュ・フランセ関西創立 90 周年を記念致しますシンポジウム「京^{みやこ}にフランスあり！——アンスティチュ・フランセ関西の歴史と記憶」に、ようこそご来場下さいました。

本日、モデレータを仰せつかりました京都大学人文科学研究所の立木康介と申します。私は 1990 年代の一時期、当時「関西日仏学館」と呼ばれていたこの学館に熱心に通った生徒でございました。その「元生徒」の立場から、私はまず、在京都フランス総領事兼アンスティチュ・フランセ関西館長ジャン＝マチュー・ボネル氏をはじめ、学館のすべてのスタッフのみなさまに、90 周年のお祝いを心より申し上げたく存じます。私自身も、OB といたしまして、たいへん誇らしい気持ちです。

さて、本シンポジウムを始めさせていただくに当たりまして、私のほうからまず本シンポジウムの趣旨を説明させていただきます。本シンポジウムが何よりもアンスティチュ・フランセ関西（すなわち旧関西日仏学館）の 90 周年を記念して催されることはいまでもありません。1927 年 10 月に誕生して以来、最初の 9 年間は九条山に、その後 1936 年からはこの左京区吉田の地にあつて、本学館はつねに「京都においてフランスを代表する存在」であり続け、フランス語とフランス文化を我が国に伝えるという使命をほとんど切れ目なく果たしてきました。その間、ナチス・ドイツにフランスが占領され、日本の他の多くの都市が戦火に包まれた時代があっただけに、本学館が活動できなかったのは 1945 年の 3 月から年末にかけてのほぼ 10 か月間のみだったという事実は、驚きに値します。

ところが、本学館のこの 90 年の歴史を証言する資料は、じつは数年前まで学館の内部にほとんど残されていませんでした。わずか数箱の未整理の段ボールが、学館の地下に保存されていただけでした。その理由はいくつかありますが、太平洋戦争末期、この建物が日本軍に接收され、また当時学館講師であったジャン＝ピエール・オーシュコルヌ先生と宮本正清先生が逮捕・投獄されるさいに、多数の文書が押収され廃棄されてしまったのは、おそらく最大の損失でした。そしてその後も、本学館にかかわる文書は折々にフランスに送られてきた

経緯がございます。もっとも、幸いなことに、学館のそばには、学館のこうした記録の欠落を長年にわたって補ってこられた方がいらっしゃいます。今月 11 日にフランス政府より国家功労勲章オフィシエ章を受勲なさった文筆家・宮本エイ子さまです。我が国のロマン・ロラン研究の第一人者として活躍され、本学館創設当初から書記長、そして講師を務められました故・宮本正清先生の奥さまで、ロマン・ロラン研究所理事を務めておられる宮本エイ子さまは、京都における日仏交流史の生き字引とも申し上げるべき方で、1986 年に駿河台出版社より刊行されましたそのご著書『京都ふらんす事始め』は、関西日仏学館の歴史のみならず、明治以来の京都とフランスの関係を知る上で欠かせないすばらしい資料でございます。この場をお借りして、宮本エイ子さまに心からのオマージュを捧げたく存じます。

他方、私の所属しております京都大学人文科学研究所は、三年前の 2014 年度に「みやこの学術資源研究・活用プロジェクト」なる調査プロジェクトを立ち上げました。明治期以降、京都において、知の近代化がいかに進められ、いかなる道を辿ってきたのか、もう少し詳しく申しますと、欧米から輸入された思想や学問がいかにして「翻訳」され、それが近代以前の伝統的な日本の知や文化にいかに接合されてきたのかを、東京とは異なる京都という土地の独自性を踏まえつつ、明らかにすることをめざすプロジェクトです。このプロジェクトは、「京大自然科学系図書館の科学史的調査」や「京都大学の美術資源の所在調査」をはじめとする 7 つのサブ・テーマから成りますが、そのうちのひとつが私の担当する「みやこの日欧交流史」、すなわち、京都における日本とヨーロッパの交流の歴史、およびヨーロッパの学芸・思想の受容の道筋をたどる研究でございます。「みやこの学術資源研究・活用プロジェクト」は毎年度、けっして潤沢とはいいがたい予算で細々と続けられているプロジェクトなので、あまり派手なこととはできませんが、「みやこの日欧交流史」の一環として私がこれまで手がけてきたのは、京都における日仏交流の中心であるアンスティチュ・フランセ関西の歴史の再構成に向けて、学館内に残存する資料を整理するとともに、いまはナントとラ・クルヌーヴの二つの外交文書センターに保管されている学館関係の資料をできるだけ多く蒐集し直し、さらに、宮本正清先生・エイ子さまのお宅に保管されていた資料もそれに加えて、それらの全体を、歴史資料として利用できるひとつのコーパスへと構築することです。そのコーパスは、まだ完成しているとは申せませんが、完成まであと数歩のところまで着

実に進んで参りましたことをここにご報告申し上げることができるのを、嬉しく存じます。本学館スタッフの長谷川さと子さんと、京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程の院生、藤野詩織さんが、私とチームを組んで実際の作業に当たってくださいました。この秋からストラスブールに留学中の藤野さんが今日この場にいないのは残念ですが、長谷川さん、藤野さんのお二人に心からの感謝を捧げたく存じます。また、私たちのチームの活動を折々にバックアップして下さっているのは、本学館事務局長のジャン＝ミシェル・ギヨン氏です。ギヨン氏にもこの場をお借りして篤く御礼申し上げます。

さて、ここまでのお話で、本シンポジウムの隠れた意義をお察し下さった方もいらっしゃるかと存じます。本シンポジウムは、この、いま新たに構築されつつある資料コーパスを活用してなされる最初の学術的イベントなのです。私たちが手にしている資料は、現在、ほぼ 3000 点に上ります。そのすべてを扱うことはもちろんできませんが、本日は、その一部を利用しつつ、後ほどご紹介するシンポジストのみなさんと一緒に、本学館の歴史のいくつかのチャプターを繙いてみたい——そのように考えております。

しかし、そちらに進む前に、私は、本日私が仰せつかっているもうひとつのたいへん光栄な役目を果たさなくてはなりません。それは、本シンポジウムの導入と致しまして、本学館創設の偉大な立役者、いずれも当時のお肩書きで、ポール・クローデル駐日大使、並びに稲畑勝太郎貴族院議員・大阪商工会議所会頭のお二人のご功績を、みなさまに思い出していただくことでございます。

各国大使を歴任する外交官でありながら、20 世紀フランス文学を代表する詩人・劇作家としても華々しく活躍したポール・クローデルという稀代の人物については、あらためてご紹介するまでもありません。1890 年にフランス外務省に入省したクローデルが、1893 年にニューヨーク副領事に任命されたのを皮切りに、上海、福州、プラハ、フランクフルト、ハンブルグ、リオデジャネイロ、コペンハーゲンなどの副領事・領事級ポストを歴任したのち、1921 年 11 月、「フランス大使」の肩書きではじめて赴任したのが東京でした。クローデルはこのとき 53 歳。それから 1927 年 2 月まで、1925 年のほぼ 1 年間にわたる休暇を別にすれば、およそ 5 年弱のあいだ日本に滞在したクローデルは、1923 年、関東大震災に遭い、一面の廃墟と焼け野原になった震災直後の東京・横浜の様子を、日本滞在記『朝日の中の黒い鳥』に記しています。クローデル自身も『繙子の靴』第三日の原稿をこのときに失いました。

私は長らく、各国経済にかかわる統計的数値に異様に明るい実務家としての外交官クロードルと、精神分析家ジャック・ラカンが「絶望のクリスチャニズム」と形容した、欲望と熱情のドラマを究極のリリズムで綴る詩人・劇作家としてのクロードルという二つのイメージを、同一の人物の上に結ばせることに苦勞しておりました。しかし、じつは、彼が日本で手がけた二つの大きな文化事業、すなわち、東京の日仏会館と京都の関西日仏学館の建設こそ、二つのクロードル像をひとつに収束させるにふさわしいエピソードといえるのではないのでしょうか。本日このあと講演して下さるミシェル・ワッセルマン先生は、2014年、日仏会館のWEB雑誌EBISUに発表された論文「関西日仏学館の創設（1927年）【La fondation de l'Institut franco-japonais du Kansai (1927)】」のなかで、クロードルの日本でのミッションがいかなる性質をもつものであったか、明確に述べておられます。曰く、「第一次世界大戦の終結直後にあって、クロードルのミッションは、日本の文化および教育の世界で、帝国崩壊後も一向に変わらないドイツのヘゲモニー的影響力に対抗して戦うというミッションだった。日本に赴任する直前にクロードルが受けとった外務省からの指示は、この点について誤解の余地がないし、それによれば、パリの高官たちが大作家としてのクロードルの威信と自覚を当てにしていたことは明らかである【la mission de Claudel, au sortir de la Première Guerre mondiale, est une mission de combat contre l'influence hégémonique de l'Allemagne dans le monde de la culture et de l'éducation japonaises, à laquelle la défaite du Reich n'a rien changé, et les instructions ministérielles adressées à Claudel à la veille de rejoindre son poste sont sans équivoque à ce sujet, et attestent que l'on compte en l'occurrence à Paris sur son prestige et sa conscience de grand écrivain】」と。実際、この指示書には、「貴殿のもてるプロパガンダ手段を用い、フランス語の本が〔日本に〕普及すること、そして日本人の学生がフランスにやってくることを励ましつつ、私たちの国語がそれにふさわしい座を獲得できるよう努力してもらいたい【En usant des moyens de propagande dont vous disposez, en encourageant la diffusion des livres français et la venue en France des étudiants nippons, vous devrez vous efforcer de donner à notre langue la place qui lui est due】」と記されていたのです。

このミッションに照らしてみれば、1924年に設立された東京の日仏会館は、クロードルにとってもしかするとまだ十分に満足のゆく成果ではなかったかもしれません。と申しますのも、同会館の設立はクロードルの赴任前にすでに決定していた事項であり、加えて、同会館の主眼は、日本についての専門的研究

を行うフランス人の若手研究者を寄宿生として受け入れ、見聞を深めさせることだったからです。つまり、そこではけっしてフランス語の普及が目指されていたわけではありませんでした。とはいえ、東京市域には、私立のフランス語学校アテネ・フランセがすでに存在し、フランス語を学びたい日本人のニーズに応えていました。これにたいして、クローデルが日本文化の中心都市とみなす京都には、市民が持続的にフランス語を学べる教室が存在しませんでした。上海在任中の京都訪問を別にしても、駐日フランス大使としての日本滞在中、ワッセルマン先生によれば少なくとも 8 回、京都に滞在し、竹内栖鳳や山本春挙といった京都の著名な文化人とも交流のあったクローデルが、それゆえ、「フランス語を普及させ、フランス思想に若者を入門させることを目標とする機関【un établissement qui aurait surtout pour but la propagation de notre langue et l'initiation des jeunes gens aux idées françaises】」をこの地に開設しようと思いついたのは、けっして突飛な思いつきではなく、むしろ、こう言ってよければ、自然な成りゆきだったにちがいありません。

そして彼の周りには、それを可能にする人材が揃っていました。東京の日仏会館には、その初代の寄宿生のひとりとして、20 世紀初頭のフランス地理学界を代表するソルボンヌ大学教授エマニュエル・ド・マルトンヌの教え子で、関西の地理を学ぶ若き研究者フランシス・リュエランがおり、クローデルは学館建設に向けた実務を彼に託すことができました。その期待に応え、リュエランは関西日仏学館設立のプロジェクトを完成させ、初代主事（すなわち初代館長）に就任します。しかし、誰よりも忘れてはならないのは、いうまでもなく、当時の関西を代表する財界人、大阪商工会議所会頭にして貴族院勅撰議員だった稲畑勝太郎氏です。本学館のこの「稲畑ホール」の名が、勝太郎氏にちなむことは言うまでもありません。稲畑氏こそが、1926 年、本学館創設の母体となる日仏文化協会をクローデルとともに設立し、学館建設の資金集めという最も骨の折れる、しかし最も重要な任務に当たられたのです。クローデルと稲畑——この二人の強力なタッグがあっただけで、本学館は日の目を見ることができたのです。

稲畑勝太郎氏は文久二年、すなわち 1862 年に京都市に生まれ、明治維新を 5 歳で迎えます。幼少時より秀才として知られ、明治 5 年、9 歳のときには、京都府の小学生の代表として天皇の御前で本を誦読する栄誉に与ります。そして明治 9 年 6 月、この年に新設されたばかりの京都府師範学校に入学します。いう

までもなく、師範学校入学はエリートコースの入り口です。しかし稲畑氏は、この師範学校でほんの1年余りしか学びませんでした。なんと明治10年6月、若干14歳にして、稲畑氏は京都府留学生に選抜され、同年11月、リヨンに向けて渡仏してしまうからです。

じつは、稲畑氏のこの留学は、どこか後の稲畑氏ご自身とクローデルの関係を思わせる二人の人物のタグによって支えられていました。その二人とは、京都初のフランス語教師レオン・デュリーと、明治8年から14年まで京都府知事を務めた榎村正直です。まさに稲畑氏の生まれたその年に来日し、長崎フランス副領事となった医師レオン・デュリーは、明治4年に京都の官立フランス学校に転任すると、フランス語やその他の学科を教える傍ら、京都府が明治5年に西陣織の職人3名をフランスに派遣する際には研修先を斡旋し、同じく西陣の工場がリヨンのジャガード織機を輸入する際にも仲介の労を執りました。そのデュリーが明治8年に東京開成学校に転出したのち、明治10年に帰国するに及んで、時の府知事、榎村正直に進言したのが、府下の学生をデュリー自らの監督指導のもとでフランスに留学させることでした。榎村知事はこの進言を受け入れ、稲畑勝太郎を含め8名の留学生を選抜し、フランスへ送り出すことに決めたのです。これによって、京都府は、府県レベルで海外に留学生を派遣した最初の例となりました。この留学によって世界に羽ばたくチャンスに恵まれた稲畑氏は、デュリーと榎村への敬愛の念を終生忘れることがなかったと伝えられます。

ただし、当時、国の期待とまでは言わずとも郷土の期待を背負い、しかも14-5歳、すなわち現在の中学2-3年生という若さで、遙かヨーロッパに渡って勉学に励むということは、今日では想像もつかないほど大きなプレッシャーや危険に身を晒されることであつたにちがいません。そのことは、稲畑氏とともに旅立った留学生仲間のうち二人が彼の地で亡くなったことに触れながら、宮本エイ子さんも強調していらっしゃるとおりです。稲畑氏自身も、8年に及ぶフランスでの留學生活、とりわけ1880年から1883年にかけて染色技術を実地に学んだリヨンのマルナス染織工場では、相当なご苦勞をなされたようです。しかし、そうした困難を跳ね返して旺盛に学びつつ、1883年にはアムステルダム万国博覧会にて京都府の出品人総代補を務め、さらに欧州各地の染織工場を巡る視察の旅において、西洋の文化と伝統を存分に満喫したのち、明治18年、すなわち1885年に22歳で帰国したときには、稲畑氏はすでに我が国の染織界の

トップランナーだっただけでなく、国際感覚豊かな文化人としてのカルチャーをも身につけていました。まさに、現代のことばでいうところの「グローバル人材」だったわけです。その後、明治期の女学生の袴地として流行する海老茶染や、軍用服地のトレンドとして定着するカーキ色染などで一財をなした稲畑氏が、1920年代の大阪財界に君臨し、ご自身の人脈を総動員して、当時関西随一の文化事業であったといっても過言ではない関西日仏学館設立の資金面でのイニシアティブを執られたことは、設立後の学館で学び、教えることになるすべての生徒とスタッフにとって、たいへんな幸運だったと申すほかありません。しかも、稲畑氏が学館のための資金集めに奔走したのはこのときだけではありません。1936年の学館の吉田移転に際しても、稲畑氏の人脈が再び活かされ、このあとワッセルマン先生からお話がありますように、本学館は、同じ吉田の、文字どおり隣の土地に建てられたドイツ文化研究所の建設費用を上回る資金を調達することができたのです。

さて、クローデルと稲畑のタッグによって創設された関西日仏学館、現在のアンスティチュ・フランセ関西は、その後、どのような歴史を辿るのでしょうか。本日は、本学館の歴史の「すべて」とはもちろんいきませんが、そのいくつかの断面を、アンスティチュと所縁の深い三人のシンポジストとともに見て参りたいと思います。ご登場の順にご紹介しますと、まず、フランス極東学院東京支部教授で、かつて本学館で教鞭を執られたこともあるフランソワ・ラシヨール先生。日本仏教史がご専門で、地蔵についてのご著書があるほか、東洋美術や日本文学、漢文学にもお詳しく、またお茶についてのご研究もあります。続いて、京都大学人文科学研究所における私の先輩で、2015年にご退職なさっていまは京都大学名誉教授でいらっしゃる、富永茂樹先生。日本を代表する社会学者のおひとりで、長らく京都芸術センターの館長を務められ、2005年にはフランス政府よりパルム・アカデミック章オフィシエ級を受勲なさっています。そして、休憩を挟みまして最後にご登壇下さるのが、立命館大学教授で、1986年から1994年まで関西日仏学館館長を務められたミシェル・ワッセルマン先生です。日本と西洋の舞台芸術の比較研究者として、オペラや歌舞伎に造詣が深いワッセルマン先生ですが、関西日仏学館館長でいらした時代には、ヴィラ九条山の建設と京都フランス音楽アカデミーの創設という、二つの大きな事業を成し遂げられました。私は個人的にも、ワッセルマン館長のもとで関西日仏学館の生徒であったことをたいへん誇りに思っております。本シンポジウムの目

玉のひとつは、第二次世界大戦下での関西日仏学館の活動に新たな光を当てることをございます。学館が多大な苦難に見舞われたその当時の様子を描き出すのに、今日、ワッセルマン先生に勝る適任者はおられないことはいうまでもありません。

本日は、短い時間ではありますが、以上の三人のシンポジストともに、聴衆のみなさまが本学館の歴史と記憶を満喫してくださることを願っております。よろしくお願ひ申し上げます。